

『「自己採取」でもいいですか？』

子宮頸がん検診には、自分で子宮の入口の細胞を採る「自己採取」と、医師に子宮の入口を直接見ながら細胞を採ってもらう「医師採取」があります。

■子宮がん検診とは

ほとんどの場合、子宮“頸がん”検診のこと。子宮頸部の表面をブラシなどでこすってその細胞をとり、顕微鏡で調べます。検診は20歳から2年に1回の受診を推奨されています。

■子宮頸がんとは

子宮の入口（頸部）にできるがんで、初期には全く症状がありません。20代で急増、30代から40代で多く診断されています。

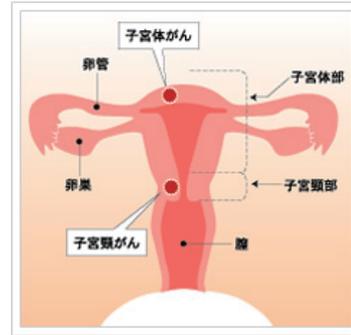
子宮頸がん検診は、細胞が「がん化」していないかを直接見ることができるがん検診です。また、異形成という「がんになる前の異常」を見つけることができるのもその特徴です。検診の目的は、「がんの早期発見」だけでなく、「がんにさせない」ことにもあります。そのため、この検診の効果を発揮するには、何よりも検査をする子宮頸部の細胞を確実に採ることが大切です。

自己採取は難しい

子宮の入口である頸部は、膣のかなり奥まった部分にあります。自己採取のための検査キットは工夫が凝らされているとはいえ、検査に十分な細胞を正確に採るのは難しいものです。

医師が直接目で見て確認しながら採取する場合に比べて、自己採取では偽陰性（病気があるのに異常なしと出ること）が大変多くなることがわかっています。

検診で子宮の診察を受けるのはとても抵抗がある、せめて自己採取で…という方には良い方



法なのですが、自己採取を選択する場合は、「異常なし」と出た場合でもうまく採取できていない可能性があることを十分わかっておく必要があるでしょう。

HPV検査との併用を

子宮頸がんは、その多くがヒトパピローマウイルス（HPV）の持続感染が主因とされています。最近ではHPV感染の有無を調べることができるようになりました。この検査も子宮頸部の細胞から調べるため「自己採取」と「医師採取」がありますが、細胞の検査に比べて両者の結果の差は小さく、「自己採取」でも概ね正確な結果が得られています。

子宮がん検診を「自己採取」で実施する場合はHPV検査も一緒に行い、もしHPV検査が「陽性」だった場合は、細胞の検査に異常がなくても婦人科を受診し、今後の検診の受け方を含め相談にのってもらいましょう。

「自己採取」と「医師採取」、どちらか選べる場合は、ぜひ「医師採取」を選んでください。

また、どうしても「自己採取」でないといやだという場合は、HPV検査も一緒に実施することをおすすめしたいと思います。